疾風怒涛の渦の中 草は萠え出で郭公は鳴き れ睦ぶ宿舎に

気は高が

児等が

悠々迪を歩まなんゆうゆうみち 明り求めて放浪いぬ の塵をふり払い

新たな夢に飛びたたん 厳しき北の大地より

果てなく魂

翔けるなり

十勝の山と平原に抱かれとかちゃまの 士幌に山小屋をうち建てぬ き野心の男の

蛮声放歌乱舞するばんせいほうからんぶ

原始林の可憐な白花に 姿雄々しき吾なれど

すがたおお

おれ

恋に涙す秋もありこい なんだ あき 清き乙女子去りて行く 心言 ふるわす春もあり

三十年後に集わなんみをとせのちっと

読み飲みの はや七十を数うなり 寮生よ再び楡影にともふたたにれかげ ああ青春の祭日も 熱き情に年は経り 語が り夜は明け